

前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

3. 「神」の現在
 - 3-1 : 聖書の神と形而上学的神
 - 3-2 : 強き神と弱き神、その彼方へ 10/28
4. 聖書から経済・政治・社会
 - 4-1 : 聖書学と社会学 11/11
 - 4-2 : 聖書学から社会教説へ 11/18
5. キリスト教と経済学説
 - 5-1 : ウェーバー・テーゼをめぐって 12/9
 - 5-2 : 近代経済学と神学——アダム・スミス (12/16)
 - 5-3 : キリスト教・資本主義・社会主義 (12/28)
6. キリスト教と政治理論
 - 6-1 : 現代思想のパウロ論 (1/6)
 - 6-2 : イデオロギーとユートピア 1 1/13
 - 6-3 : イデオロギーとユートピア 2 1/20

<前回>次元論と宗教哲学**<言語から宗教的実在へ>**

- ・素朴実在論でも反実在論でもなく
- ・人間的現実性の反省から

↓

では、言語論から再構築される人間的実在とは？ そこにおける、宗教的実在とは？
この批判的実在論の内容について、「生の次元論」の範囲で、全体像を概観する。

(1) 生の現象学から次元論へ

1. 次元論の文脈（1950年代以降）：宗教と文化の関係論。病・医療の問題。
2. 『組織神学』第三巻。

(本質) 存在／実存（存在）／生（精神と歴史）

：有限性／罪責性／両義性、 神／キリスト／聖霊
死 罪 無意味性

3. 生の現象学(ST.3, 17)→生の両義性の記述

精神：文化、道徳、宗教の両義性

生の構造：次元論→「生の多次元的統一性」(the multidimensional unity of life)

生の動態：弁証法的過程

- ・「本質的要素と実存的要素の混合(mixture)」
- ・「次元」概念
- ・「可能性の現実化」

9. 人間的生（広義の生）の現実について、無機的次元、有機的次元（狭義の生＝生命）、心理的次元、精神の次元を区別する (ibid., pp.17-30)。→物質、生命、心、精神

10. 多次的統一性としての生：

- ・分離論（実体的な二元論）と還元主義（一元論）への批判

↓

物質、生命、心、精神からなる自己組織化の連鎖

11. 諸学の固有性と連関性

12. 生の生成論：「生は可能的存在の現実化として定義される」(ibid.,p.30)。

14. 生自体の運動＝生成。ヘーゲル（若きヘーゲル）の生の概念→弁証法

生の生成：自己同一、自己変化、自己帰還の三つの要素によって弁証法的に構成され、このような三要素から構成された生は、自己統一、自己創造、自己超越の三つの機能（運動）において自らを生成すると考えられる (ibid.,pp.30-32)。

15. 精神の次元が現実化した人間の生：

文化：意味世界の構築 道徳：人格的自己同一性の確立

宗教：意味根拠への超越、深みの次元

(2) 次元論から見た宗教

・物質、生命、心、精神の諸次元の関係をテーマとした自然哲学（自己組織化のシステム論）の構築。複雑化／相転移／全体論的パターン生成

これによって、宗教的実在についての人間学的条件を描くことが可能になる。

↓

- ・宗教は人間的な生にとって本質的な精神的次元の現象である。
- ・精神の次元における「自己超越性」（問い・探究、エロース）。
- ・宗教は先行する諸次元と多次的統一性において連関づけられている。
- ・宗教は生の現象として、その両義性を免れていない。

世俗化とデーモン化との戦いとして存立できる。

↓

ここに、経済と政治という社会理論と宗教論とが交差・連関する問題領域（文化・道徳・宗教によって構成された精神的生の構造・プロセス）がある。

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

3. 「神」の現在

3-1：聖書の神と形而上学的神

1. キリスト教と神観念の複合性

(1) 絶対的なものとしての神

1. 「絶対的なもの」、神の絶対性とは何か。全能性、最高存在・最高価値？

→ 形而上学的な神

2. 形而上学批判を基調としたポストモダンの思想状況において、伝統的な神の絶対性は問い直しが求まっている。聖書的な宗教に適切な神概念とは何か。

(2) ヘブライズムとヘレニズム

S. Ashina

3. キリスト教的伝統を構成する複合性への意識：

聖書の宗教とギリシャ思想の相違、ギリシャ的形而上学とその神概念からの差異の意識。近代における、ギリシャ的近代の伝統との差異化におけるユダヤ的キリスト教的伝統の再発見

4. マュー・アーノルドにおける、「ヘブライズム」(Hebraism)と「ヘレニズム」(Hellenism)の類型論

水垣渉「ヘブライズム・ヘレニズム・キリスト教」武藤一雄・平石善司編『キリスト教を学ぶ人のために』世界思想社、一九八五年、二四一三四頁。

5. 「ルネサンスと宗教改革」

「それはわれわれのヨーロッパ世界が二重の源泉から成立していることにもとづく対立、つまり予言的・キリスト教的な宗教世界からと古代の精神文化からとに由来する根源的対立なのである」、「この二つの契機はそれがたがいに緊張関係に立っていることによって」、「将来においてもわれわれの運命になるであろう。」

トレルチ「ルネサンスと宗教改革」(1913)、『ルネサンスと宗教改革』内田芳明訳、岩波文庫、74頁。(Ernst Troeltsch, *Gesammelte Schriften 4. Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie*, Scientia Verlag, 1981(hrsg.v. Hans Baron, 1925))

(3) キリスト教神学の形成過程

6. 古代地中海世界におけるキリスト教の形成・展開 → キリスト教思想はヘレニズムとヘブライズムとの緊張関係において成立した（ハルナックの言うキリスト教の「ギリシャ化」）

7. キリスト教神学は先行するギリシャの哲学的神学を学的基礎としつつ、キリスト論によって哲学的神学を変革した。

Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*, Basil Blackwell, 1988.

2. 聖書の神と形而上学的神との緊張関係**(4) ハヤ・オントロギア**

8. 有賀鐵太郎：ヘレニズムとヘブライズムのそれぞれの思考の核心を、オントロギアとハヤトロギアとして分析した上で、キリスト教を両者の動的関係体としてのハヤ・オントロギアと説明している。

9. 「ハヤトロギアとオントロギアとの間における緊張関係が問題とならざるをえない。私の言いたいことは、その何れか一方を切りずてることではなく、また両者の早急な総合を求めることでもなく、むしろ両者の相異を認めながら、その関係を緊張関係、すなわちトノーシスとして捕えるべきだということである。」⁽⁴⁾

有賀鐵太郎「神学的原理としてのトノーシス」(一九七三)『信仰・歴史・実践』(『有賀鐵太郎著作集 五』)創文社、一九八一年、一八二頁。この点については、芦名定道『自然神学再考』(晃洋書房、二〇〇七年、三一―三四頁)も参照。

(5) 聖書の宗教と存在論的思惟

10. ティリッヒ『聖書の宗教と究極的實在の探究』

Paul Tillich, *Biblical Religion and the Search for Ultimate Reality* (1955), in: MW.4, pp. 357-388.

11. 聖書の思惟とギリシヤ的哲学的思惟（存在論）との差異性あるいは緊張関係→「両者が究極的な一致と深い相互依存性を有している」（357）

12. 19世紀の宗教批判 → カール・バルト

- ・宗教批判はまさに「宗教」に、宗教化した自由主義神学に、妥当する。神学の秘密は人間学である。
- ・宗教から啓示を峻別する。宗教批判は啓示には妥当しない。

13. バルト主義者：宗教は、啓示との対立する、「人間から神への運動」「被造性と有限性を越えようとするデーモンのな人間の上昇」（358）である点において断罪されねばならない。→「聖書の宗教」ではなく、「聖書の啓示」と言うべきである。

14. 人間存在としての可能性としての宗教。人間的生の精神的次元における自己超越性としての宗教（前回の講義）。

ティリッヒ：啓示は人間によって受容されて初めて「啓示」となるのであり、啓示には人間の側の受容——まさにこの受容こそが「啓示の器」としての「宗教」にほかならない——が不可欠である。

↓

聖書は神の啓示の書であるのみならず、同時にその啓示を受容した人間による「自分の宗教についての報告」である。

正典としての聖書という伝統的理解の再解釈。聖書は無謬か？ 正典とは？

客観化、固定化、実体化の問題性。「ある」から「なる」へ。

15. 存在論：広義（人間に固有の思考法としての）と狭義（古代ギリシヤの）

- ・「存在するものの諸領域における存在の現前とその諸構造」を示そうとする「存在論的な分析」（360）。
- ・「なぜこれはこのようであって、あのようではないのか」「なぜ私は存在するのか」といった問いを組織的に考え抜く努力としての哲学（存在論）から人間は逃れるはできない。「人間は問う存在者」、「有限性の中で存在を問う存在者」である（361）。

（6）聖書の人格主義

16. 聖書の「人格主義」（personalism）：

- ・「人格」とは、「自己自身と、また世界とに関係づけられ、またそれゆえに、理性、自由、そして責任を伴う」、「人間的領域での個別性」（366）を意味する。いわゆる「我—汝」関係。
- ・あらゆる宗教において、聖なるものは人格的な存在として経験される。cf. 波多野精一

↓

聖書の宗教、その人格主義は、独自か？

- ・ティリッヒ：聖書の神の人格性をその無制約的あるいは徹底的な性格において、他の人格的神から区別できる。人格主義と擬人観との区別（波多野）？

17. 人格主義：神を個別性において、つまり、「一存在者」としての経験する。

S. Ashina

存在論的な神概念：「存在自体(Being-itself)は、存在する一切のものに現前し、一切のものは存在に参与」(368)しているのであり、それは個々の存在者の個別性を超越して働く「存在の力」である。

↓

この存在論的な問いにおいて、人格的神の個別性は超越されることになる。「存在論は一般化し、聖書の宗教は個別化する」(371)。

18. 聖書の宗教と存在論との差異：

19. 神と人間の人格的關係は、自由な相互性に基づく。

「聖書の宗教の動的な性格の根源」(368)を成している。神の人間創造は自由な人格としての人間存在の創造であり、その意味で、人間は創造の善性にも関わらず、墮罪の可能性をも有する自由な主体なのである。これは、「人間は祈るが、神は聴きとどけたり聴きとどけなかつたりする。人間は熱心に努力するが、神ははねつけることがある」(ibid.)。

祈りとは、神を人間の欲望実現の道具とするための魔術ではない。

20. 聖書的な人格の相互性は、存在論的神観念（形而上学的な神）に矛盾？

自由な相互關係が時間、空間、因果律、実体といったカテゴリー内部で成立するのに対して、存在自体はこれらのカテゴリーを超越しているからである。

21. 言葉：「人格と人格との關係性は言葉を通して現実となる」(ibid.)。啓示は言葉による神の語りかけであり、人間は聴くように求められる。

しかし、「存在論は別のカテゴリーで考える」(369)。すでに見たように、存在論的思惟にとって、すべての存在者は存在自体に参与し、それを分有することによって存在しており、存在自体は、存在するものすべてのなかに現前する。したがって、人間と存在自体との關係は直接的であり、言葉によって媒介されるものではない。イエスにおける神的言葉の受肉は「聖書の人格主義の完成」(371)を意味するが、存在論的思惟にとっては理解不能な事態である。

22. 聖書の宗教と存在論的思惟との相違と対立。しかし、聖書の宗教も存在論的問いを免れることはできない。

・「あらゆる真の祈りにおいて、神はわれわれの祈る相手であると同時に、われわれを通して祈る者である。なぜなら、神の靈こそが正しい祈りをつくり出すからである」(387)。

↓

神は人間にとって、その人間自身よりもさらに近い關係（直接的な）にある。

通俗的な人格イメージは適切ではなく、存在論的思惟に接近する。

23. 「救済的な存在論など存在しないが、存在論的な問いは、救済の問題のなかに内包されている。存在論的な問いを問うことは避けられない課題である。パスカルに抗して私はいふ、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と哲学者たちの神とは同じ神である。神は人格であり、また同時に、人格としてのそれ自身の否定である。」(388)

24. 聖書の宗教と古代ギリシアの形而上学的思惟：

相互の決定的相違にもかかわらず、いわば強い神とも言うべき神概念の成立に共に寄与し、また聖書の宗教の神は「弱き神」でもある。

ポストモダンの形而上学批判がキリスト教思想によって有する意味の複雑さ。

3. 神の絶対性と形而上学批判

(7) 宇宙論的で強い神

25. 聖書の宗教と古代ギリシャの哲学的思惟：両者が宇宙論という枠組み共有→強い神とも言うべき神概念の成立に共に寄与。

26. 聖書の神における神の聖性

ルドルフ・オットー『聖なるもの』：ヌミノーズの経験。ヌミノーズが心情内に喚起する感情反応は、「戦慄すべき秘義」と「魅する秘義」の両極構造（二重内容）を特徴としている。イザヤ書六章のシラピムの歌。

→ 聖書の神は、畏怖し魅惑する強烈な力の神、つまり「強い神」の典型。

オットー『聖なるもの』山谷省吾訳、岩波文庫、一九六八年、二三頁。（Rudolf Otto, *Das Heilige. Über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen*, C.H.Beck, 1987(1917).)

27. この神経験が合理化：怒りと愛という図式の成立

図式化＝合理化が聖書自体の内部で始まっており、聖書の神は、威力（しばしば非合理的な暴走する力となる）と知恵（「主を畏れることは知恵の初め」）の両極性を有しており、「強い神」も外見ほど単純ではない。

28. 強い神のキリスト教思想における展開。

キリスト教は、古代思想の共通問題であった悪の起源という思想的文脈において、「無からの創造」論を構築し、宗教改革期においては、神の独占的活動性、そして二重予定説を生み出す。

29. アリストテレス：自然学における運動論→『形而上学』の「不動の動者」

↓

「神の不可受苦性」の思想：一切からの影響作用を超えて超然としている神

cf. 熱情の神あるいは妬む神

30. 「強い神」：自己完結的で全包括的な神は絶対的な威力を有する支配する神。

最高存在・最高価値としての神。最上級の神。

(8) ハイデッガーの形而上学批判

31. 近代の宗教批判の系譜：フォイエルバッハからマルクス、フロイトへ、そしてニーチェからハイデッガー、ポストモダンへ。

・啓蒙的合理性の立場からの形而上学批判

・啓蒙的理性とキリスト教的伝統からなる西洋世界（Abendland）総体に対する批判
芦名定道「キリスト教思想と形而上学の問題」『基督教学研究』（京都大学基督教学会）第二四号、二〇〇四年、1—二三頁、「現代キリスト教思想と宗教批判——合理性の問題を中心に」『宗教研究』（日本宗教学会）、三五七号、二〇〇八年、掲載予定。

32. ハイデッガー：形而上学へ正面から取り組んだ——形而上学の根拠からその克服へ——。『形而上学とは何か』（Was ist Metaphysik?）の「序論」

Martin Heidegger, *Was ist Metaphysik?*, Vittorio Klostermann, 1981 (1950). (『形而上学と

S. Ashina

は何か』大江精志郎訳、理想社、一九五四年。)

33. 形而上学：「存在するものとしての存在するものを思惟すること」(ibid., 8)。

それは、「存在するものを存在するものとして問うがゆえに、存在するものにとどまり、存在としての存在には向かわない」(ibid.)。「存在の真理は形而上学にとっては隠されている」(ibid., 11)。「存在するものと存在との混同」「存在忘却」(Seinsvergessenheit) (ibid., 12)

↓

形而上学は、存在するものの存在性(Seiendheit)を二重の仕方で表象する。

- ・存在するものの全体を、その最も普遍的な特徴の意味において（存在論）。
- ・最高の従って神的なものの意味において（神論）。

＝形而上学的思惟（狭義の存在論であるとともに神論）の「存在一神論」(Onto-Theo-Logie)的本質。

34. キリスト教的西洋世界において、ヘレニズムとヘブライズムが緊張関係は単なる偶然ではない。

存在の「性起」(Ereignis)、「存在の命運」(Seinsgeschick)として生起した。

今や、ニーチェと共に、古代ギリシャを第一の元初(erste Anfang)する形而上学的エポックは夕暮れにさしかかり、存在の命運は第二の、別の元初(andere Anfang)への移行しつつある。

35. 「ニヒリズムの本質とニヒリズムという性起のための圏域は、形而上学それ自身である。これについては常に次のことが仮定されている。すなわち、我々が、形而上学という名称で哲学の一つの教説のことや、まして哲学の特殊部門にすぎないものなどを思いもせず、有るものが感性的な世界と超感性的な世界とに区分され、前者が後者によって担われ規定される限りにおいて、全体としての有るものの根本構成(Grundgefüge)のことを考える、との仮定である。形而上学とは歴史空間(Geschichtsraum)であり、その内部では、超感性的な世界、諸理念、神、道德律、理性の権威、進歩、最大多数者の幸福、文化、文明が、それら立て上げる力を喪失して空しくなるということが命運となるのである。」(S.216-217)

ハイデッガー「ニーチェの言葉「神は死せり」、『杣径』(ハイデッガー全集 第五卷) 茅野良男、ハンス・ブロッカルト訳、創文社、一九八八年。(Nietzsches Wort) » Gott ist tot 《 (1943), Holzwege, Vittorio Klostermann, 1980(1950).)

(9) キリスト教思想と形而上学再考

36. 近代以降の宗教批判は、キリスト教思想に伝統的な神理解の再考を迫るものとなった。とくに、ニーチェとハイデッガーに依拠しつつ展開されているポストモダンの形而上学批判は、キリスト教思想の脱形而上学化を促しつつある。しかし、ポストモダンが二十一世紀のキリスト教思想にとっていかなる意味を有するのか、また形而上学はあらゆる意味で終焉を迎えたのかは、決して自明ではない。むしろ、キリスト教思想においては、現在、脱形而上学的思惟と形而上学批判以後の形而上学再考の試み（たとえば、パネンベルクやプロセス神学）とが交錯していると評すべきであろう。

37. 芦名定道「日本の宗教哲学とその諸問題——波多野、有賀、北森」

現代キリスト教思想研究会『アジア・キリスト教・多元性』第9号、2011年、89-111
頁。

芦名定道「ホワイトヘッドの形而上学とプロセス神学」『基督教学研究』第二五号、
二〇〇五年、二一—四一頁。